

# 読書感想文入賞作品

## 最優秀賞

『アルジャーノンに花束を』 ダニエル・キイス著

### 知能を求める心は何かを失うのか

電子制御工学科2年 今岡美杜

人間の根源的欲求を技術力で解決した時に人は何を得て何を失うのか。人間の在り方とは。

虚構ながらもそれを忘れるかのような壮大なスケールで描かれ、更にはバッドエンド。そのすべての場面において、人の心の裏側へ容赦なく切り込んでくる主人公チャーリーの魂の叫びに、心を強く揺さぶられる一冊である。

精神遅滞者であったチャーリーは近未来的脳外科手術を受け、天才と呼ばれる域に達する事となった。しかし、その喜びからほどなくして知的成長は感情的成長を追い越し、鋭利な知能が故、知識探究欲と自我のはざままで苦悩する日々を送るようになる。

そして、遂に知能と心の統制が取れなくなり印象的な言葉を残す。「知能は人間に与えられた最高の資質のひとつ。しかし知識を求める心が愛情を求める心を排除してしまう事があまりにも多い。」と。

私は、全編を通して、チャーリー的心情と共に過ごしてきたが、この状況にだけはすぐに賛同できず、どのように捉えたらよいのか分からなかった。人間は、知能を支えるだけの愛情を備えていないと暴力的思想となり、その姿勢が人を遠ざけ葛藤と孤独の中で模索することとなるのだろうか？

私は、チャーリーと自分の心にわずかな違いを覚えながら読み進める事となった。

そして、小説後半はチャーリーが自ら立てた仮説。「人為的に誘発された知能はその増大量に比例する速さで低下する」に沿うように、最大限に開花した知能は失われゆき、相反するかのように心を回復していく様は、春の小川のように穏やかでゆっくりと時間が流れていくようだった。

そして、その流れの行き着く先の答えは、チャーリーと同じく数奇な運命を辿った実験用マウス、アルジャーノンが持っていた。

私は思う。チャーリーが忘却の恐怖や苛立ちや自らの運命を含めた、あらゆる負の感情を昇華し、以前とはまた質の違う寛容さが生み出した圧倒的肯定力でアルジャーノンの最期に慈悲深さを見せ、心を取り戻す姿は、決してバッドエンドではなかったと。

そして、知能を求める事で人間性を失う事などないと再認識した。

本編で「愛情の裏付けがなければ知能は精神崩壊をもたらし、人間関係の排除へ向かい、暴力と苦痛にしか繋がらない。」とあるが、その結論は余りにも乱暴すぎるのではないかと考える。

勿論、心の豊かさの必要性を説きたいのは理解できる。

しかし、誰しもが知識と愛情をバランスよく持ち合わせている訳ではない。愛情が足りないからと言って探求心を忘れてはいけなし、その逆もまた然りだ。何かを与えてもらえなかった事を振り返るのではなく、自分で探しに行くべきだ。何も失うものなどない。

そしてそれが足りなかったとしても誰も傷つけなどしないのだ。

チャーリーと私の結論はわずかに違うのかもしれないが、重要なのは洞察する機会をチャーリーが私に与えてくれたことだ。

あとの宿題は著者が「教養は人と人の間に楔を打ち込む」と述べた言葉だ。補足する言葉がないので真意が分からずにいる。これはまた数年後この本を手にとった時に理解できるようになっていたい。

その為にも、強く、強く人生を生き抜き、慈悲深く平和を願い続けたチャーリーに恥じない道を歩んでいきたい。

そしてアルジャーノンに花束を。

## 図書館の利用にあたっての注意

### 図書館の本は大切に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かっただけで利用してください。

### 図書館では静かにしましょう

小声で勉強を教え合うのは構いませんが、時々大きな私語や笑い声が聞こえます。しばらく続くようであれば、注意しに行きます。息抜きでちょっとお喋りしたい気持ちは分かります。でも、静かな館内に、貴方たちだけの声が響き渡っていませんか？貴方が一人で勉強している時、うるさくしている人たちに苛々したことはありませんか？一人一人が気を付けましょう。

### 返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていなければ返却期限を延長することができます。手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。



## 優秀賞

『ゼロからトースターを作ってみた』 トーマス・トウエイツ 著

# ゼロからトースターを作ることはできるだろうか

物質化学工学科2年 埴淵 幸優

ゼロからトースターを作ることはできるだろうか。私も作者同様、最初は簡単に出来るものだと思っていた。電子レンジに比べ、トースターはニクロム線に電気を通すだけでいいからである。しかし、本を読み驚いた。身のまわりのいたるところにある鉄さえ簡単には精錬できなかったのだ。

この本の著者であるトーマスはトースターを作るにあたって、いくつかのルールを設けた。その中の一つに、

産業革命以前に使われていたものと「基本的に変わらない」道具を使ってトースターを作る。

というものがある。しかし、鉄を精錬する時点でそのルールを破ることになってしまった。鉄の精錬がどれだけ難しいか分かっていなかったのだ。しかし、消費者からすれば、それを知っている人の方が少ないのではないだろうか。知識として知っていても、実際には出来ないことは多い。しかし、私たちの身のまわりにある製品には多くの鉄が使われている。私は改めて家電製品等が高い技術力によって作られていたのだと気づかされた。トーマスはトースターを作るために約1187ポンド（約15万円）と9ヶ月を費やした。もし、身のまわりの製品すべてをゼロから作るとしたら、どれくらいの金と時間を使うのだろうか。それを考えると他人に依存して生きているということがよく分かった。

また、この本には原料の採掘場がいくつか紹介されていた。その中のノリリスクという採掘場は、土壤が汚染され周囲には木さえ生えないという。私は今まで安価な商品を見ても、定価に疑問を持ったことはなかった。しかし、そういう安価な商品に使われている材料はこのような環境に配慮しない採掘場で採られたものなのかもしれない。もちろん安価であるほど、消費者からすれば嬉しいし、企業もコストを削減しようとするだろう。しかし、環境に配慮しなければ、採掘場周辺で暮らす人々に迷惑がかかる。そのため、環境と経済のバランスをとる対策が必要だと思う。私も消費者側として、できるだけ長く使えるように、製品を大切に使い続けようと思う。

また、トーマスは石油の入手に困り、ごみを原材料として利用した。しかし、うまく再利用するには多くの材料が混ざりすぎているらしい。身のまわりにある物は多くの原料からできている。これらの原料すべてを分別することは不可能だ。しかし、ペットボトルなどのように、簡単に分別できるものもある。これからの時代、資源が枯渇してくると考えられている。その時のためにも、再利用についての認識が広がっていかなければ

ならないと思う。

私はこの本に色々なことを考えさせられた。特に衝撃的だったのは、凄い技術の中で暮らしているにもかかわらず、シンプルな構造であるトースターさえ作れないということだ。それも含め、この本で考えたことを今後に活かしていきたい。

『ゲノム編集の衝撃』 NHK「ゲノム編集」取材班 著

## 「神の領域」迫るテクノロジー 「ゲノム編集の衝撃」を読んで

物質化学工学科 2年 広部 愛莉

私は、一年生の生物の授業でゲノム編集についての動画を見たことをきっかけにこの技術に興味を持つようになりました。以前から、お菓子の袋などに「遺伝子組み換えでない」という言葉が書かれており、この言葉の意味と必要性が分からずにいました。しかし、動画を視聴したことによって、遺伝子組み換え、または、ゲノム編集などの言葉の表す意味、そしてまだ安全性が示されていないなど世間からはまだまだ受け入れられていないということが分かりました。

まず、ゲノム編集とは遺伝情報を高精度に改変できる技術で、ゲノムDNAを切断する酵素である人工ヌクレアーゼなどを用い、遺伝子・配列を標的にし、狙った箇所の生物遺伝子を壊したり、置き換えたりすることです。病気のモデルとなる実験用動物の作成、難病の治療や予防法の開発、農作物や家畜などの品種改良、バイオ燃料の生産に適した植物の開発などに幅広く用いられています。

私はこの本を読んで深く印象に残っていることがあります。一つ目は食料に関してです。今、世界の人口は七十億人程度ですが、アフリカ大陸を中心に人口爆発が起こっていることからこれから人口はどんどん増えていくと考えられます。すると、世界人口に対しての食料が足りなくなり、今まで以上に飢えに苦しむ人が増えてしまいます。こんな時に食料にゲノム編集を施すと肉付きのよい肉や魚をつくれったり、厳しい環境の元でもたくさんの作物をつくるのが可能になります。そうすると、世界の食料問題も少しは解決につながるのではないのでしょうか。

二つ目は難病の治療についてです。難病には特効薬がなく、検査の数値を抑える薬、痛みを和らげる薬といったように死ぬまでの時間を少しだけのばすようなものだと思っていました。しかし、病気にもゲノム編集を行うと病気に侵されてしまった細胞を入れ換えていくので、難病を治すことも可能になるはずです。

みなさんはゲノム編集に対してどのような意見を持っていますか。私は、画期的なアイデアで日本だけでなく世界も明るくする素敵な技術だと思っています。しかし、中には遺伝子を変化させた生物を食べることに大きな抵抗を感じる人も多いと思います。でも、ゲノム編集は、遺伝子組み換え技術と違い他の遺伝子を入れ換えるということをしていません。例えば、肉付きのよい肉や魚を作るために手を加えるのはミオスタチンという、動物の中に存在する遺伝子の働きを一つ抑えるということだけで、これは自然界でも突然変異としてよくあることです。これらのことを消費者に十分に説明し、"どのような条件をクリアすれば安全な食品とみなせるか"という基準づくりをしていけば理解の輪は広がっていくのではないのでしょうか。

ゲノム編集とは、世界の問題を解決することが可能になるというよい側面がありますが、生態系を崩してしまうなど取り返しがつかなくなってしまう悪い側面もあります。

私は将来、ゲノム編集に関係する仕事に就きたいと思っています。もしその夢が叶ったなら目の前のことだけでなく広く物事を考え、この社会が少しでも明るくなれるような研究をしていきたいと思っています。

『モモ』 ミヒャエル・エンデ 著

## 6年かけて感じた「モモ」

物質化学工学科1年 平野 彩

小学4年生の時、私は「モモ」の世界観が大好きでお気に入りの本でした。16歳になった夏休みに、たまたま本棚でこの本が目にとまりまた読みたくなったので、ページをめくっていくと夢中になってしまい気がつくまで最後まで読んでいました。

「モモ」は、町外れの円形劇場跡に迷い込んだ少女モモが色々な場所に旅をしてたくさんの人と出会ったり「時間どろぼう」と戦ったりしていきます。この本を読んで一番最初に感じたことは、大人こそ読むべき作品だということです。私は、小さい頃に読んでいた時には感じなかったことを感じました。

その中でも心に残ったのは、

そこでせかせかと働きます。どんどんスピードをあげてゆく。ときどき目をあげて見るのだが、いつ見てものこりの道路はちっともへっていない。

だからすごいきおいで働きまくる。心配でたまらないんだ。そしてしまいには息がきれて、動けなくなってしまう。道路はまだ残っているのにな。

という文章です。小さい頃、よく計画を立てて物事をやりなさいと言われてきました。しかし、大人になって

いくにつれて将来のことばかり考え過ぎて不安になり心が疲れてしまうということが多くなると思います。私自身も、受験の時も今でさえも不安だらけで考え過ぎてしまうことがあります。しかし、そういう心に余裕がない時こそ今できることを一生懸命にやり、後のことを考えずがむしゃらに楽しんでやろうと思いました。そうすれば、いつの間にか達成して、大切なことを見つけることができているかもしれません。また、

ふたりはなんどもだきあい、そばをとおりかかった人びとも立ちどまって、いっしょに泣き笑い、よろこびを分かちあいました。いまではだれにもじゅうぶんにその時間があるからです。

という文章からもわかるように時間を好きなことにたっぷり使えるということは、自分自身が生きている証だと思えます。

小学生の時に、お金で買えないものは、「命」と「人の心」と「時間」と先生から教わりました。その時は、時間は有限だから大切に使うという意味でしか捉えていませんでしたが、「時間どろぼう」によって時間が盗まれた人々は考える時間も節約してしまい心も奪われてしまいました。時間を有効活用することは大切ですが、それにとらわれすぎて人が時間に支配されていることはないでしょうか。それは、本当の意味で生きていると言えるのでしょうか。時間とは、生まれた時から自分自身で自由に使うことができる一つの財産です。そしてその財産を、自分の好きなように使うことによってはじめて本当の意味で生きていると言えると思いました。

このように、小学生の時、時間はただ大切に使うべきものだと感じていたけれど、6年経った今はその使い方は自分自身で好きなように使う自由と責任があると感じました。私自身も好きなことができる時間があるからこそ、6年間でたくさんのことを学び経験したうえでこの本をもう一度読んで違う感じ方ができました。これから大変なことがいっぱいあるかもしれないけど、一つ一つ焦らず自分なりにやっけていこうと思います。

## 図書館の防犯・防災対策

図書館では防犯・防災対策に取り組んでいます。地震などで1階から2階へ上がれなくなった時などのために、1階の雑誌コーナー前の消しゴムの消し屑を吸い取るクリーナーが置いてある机に、ホイッスルと防犯ブザーが入った箱があります。また1階と2階に、コンセントに差し込んで停電時には懐中電灯にもなるLEDライトを設置しています。

貼り紙もしていますが、図書館にいる時に地震が起きたら、本棚からすぐに離れるようにしてください。

